

## 解説

### 小さな命を慈しみ刻印する人

吉田博子詩画集『聖火を翳して』に寄せて

鈴木比佐雄

吉田博子さんの詩画集の絵画を眺めていると、絵画から詩が溢れてくるような思いがする。この詩画集では、吉田さんの詩作の秘密が絵画によって明らかにされてくる。吉田さんは、詩的精神を詩でも絵画でも同時に表現できるのだろう。十一冊の詩集を刊行している吉田さんが、今回初めて詩画集を刊行した。二十六篇の詩篇と三十六枚の絵画、詩とイラストが組み合わせられた作品が三点、また孫の貴博さんの絵画九枚も収録されている。この詩画集は、吉田さんの詩作のより深い理解も絵画によって多くのヒントを与えてくれている。カバー写真の絵画はタイトル詩にもなった『聖火を翳して』で、I章の冒頭に同名の詩もある。その絵画は吉田さんが娘さんとお孫さんの暮らすアパートを訪ねた時に心に刻まれた光景を描いたものだ。娘と孫が育てている草花、またかつて飼っていたアヒル、ネコ、なまずなどのお墓のある庭を見ながら吉田さんには、その光景が小さくても健気で懸命に命の火を灯すように思えたのだろう。その慎ましく「聖火を翳して」生きている娘や孫に、吉田さんは逆に元気付けられて、人間が多くの命と死んだ命の記憶によって生かされていることを知らされる。吉田さんはきっと今生きている命と死んだ命の両方から永遠の命のような光景を目撃してしまい、その光景を絵画か詩のいずれかで表現したいという衝動が湧き上がってきたのだ。その意味では吉田さんの絵画と詩の手法はあまたの命を刻印するための方法なのだろう。

I章の二番目の詩「生まれて死ぬこと」の終わりの方の詩行に「月下美人と呼ばれるサボテンは／まるで子供がうまれるそのものに／ふるえながら花開いてゆく／それは大きな神の御手に／ゆだねられているのだろうか」と記されている。吉田さんは人間の子供が生まれることと花が咲くことを全く等価と感じているからこそ、このような詩が誕生するのだ。また絵画でも「花開く瞬間」という同じテーマで試みられている。三番目の詩「森はわたしの家族」は、誰もいなくなった北欧のアーブラの森にある村に住み続けている老婆の心情を描いている。老婆に「わたしは木のように／根っこで自然とつながっています／わたしはこの人生に満足しています」と語らせている。I章の他の詩篇にも、このように命を慈しむような詩篇が記されている。

II章「母樹を離れて」には、母への鎮魂詩が多く書かれている。育ての親であった母への介護とその死を傍らで見取ったことから命の不思議さを自らの肉体を重ねながら記していく。母の死の衝撃を堪えるために畑仕事を通して、母の命が土の中で様々な生きものの中に宿っていることを感じ、その絆の深さを記している。小さな畑や庭にも様々な命が刻々と宿り訪れてくる。その命との対話を刻印するために、詩だけでなく絵画が必要だったのだろう。

絵画集の吉田さんの三十六点は、「仏像など」「自画像と人物」「花と生きもの」「落葉」「千年生きる」の五つに分けられている。絵画の特長は、吉田さんと対象との距離がとても親密であり、対象への感動が絵筆に伝わり、吉田さんが楽しみながら大胆な構図を伸びやかに描いている。また色彩も色を置いたというよりも、対象から色が滲み出てきたような、技巧を感じさせない自然な感じがする。「仏像など」には、吉田さんが仏像、野の石仏、円空の木彫り像、五百羅漢像、埴輪、花の精などから様々な民衆の願いが込められた聖なる存在を感じ取っている。そんな瞬間に吉田さんはきっとその感動が消えないうちに荒々しいタッチで一気に描いたのだろう。吉田さんの絵のテーマは目撃されている単なるリアリズムを超えて、命のリアリズムのような対象の内側から溢れ出てくる精神や魂を捉えようとしているのだろう。

最後に収録されている孫の貴博さんの絵画九点にも、例えば「ぼくの描いた仏さま」や「泣く虎」にも吉田さんの命のリアリズムが伝承されている気がする。「ぼくの描いた仏さま」は、紫の花の上に仏様が座禅を組んでいる絵だ。花と仏がこのように融合し自然に結びつい

ている絵は見たことがない。また「泣く虎」の絵は、動物の中で最も強いはずの虎が涙を流している絵だ。障害を抱えてハンデのある貴博さんの悲しみが、この虎の涙となってこちら側に伝わってくる。吉田さんがなぜ自分の詩画集に貴博さんの絵を収録しようと思ったのか。自分の感動を他者に伝えて他者もそれに感動する素晴らしさをお孫さんに伝えたかったに違いない。詩と絵画の両方を愛する人びとに、あまたの命を慈しむ人びとにこの詩画集を手にして欲しいと願っている。